

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 3 日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2014～2019

課題番号：26370032

研究課題名（和文）近代日本の倫理学における儒教の変容と再構築-和辻哲郎と西田幾多郎の倫理思想を軸に

研究課題名（英文）Transformation and Reconstruction of Confucianism in the Ethics of Modern Japan-With focus on the Ethical Thoughts of Tetsuro Watsuji and Kitaro Nishida

研究代表者

朴 倍暎（PARK, Baiyeong）

日本女子大学・人間社会学部・教授

研究者番号：70361558

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は和辻哲郎など近現代の日本の思想家たちの儒教理解の方向性を分析し、それを土台に儒教理解の再構築への可能性を打診したものである。本研究はこれまでの研究成果を踏まえつつ令和元年度（2019年度）において「日本近世儒学における「心」の問題」（『日本女子大学紀要人間社会学部』30号、2020.3）を発表した。「心」の問題を中心テーマに掲げたこの論文では和辻哲郎の儒教認識に関する分析、そして「心」を中心に朱子学と伊藤仁斎の儒教思想との総合比較が行われた。比較における問題提議を明確にした上でさらにこの論文は朝鮮の丁若鏞の思想との比較を行い、日本の倫理思想における儒教の特徴及び変容の再考察を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本近現代の倫理思想の中での儒学の再構築を試みた本研究において用いられた論法は朱子学と伊藤仁斎の思想など江戸の儒学との比較研究であった。日本の近世儒学研究では朱子学のもつ意義が比較的軽視される傾向がある。その原因の一つは、孔孟の思想に忠実しようとする古学派の影響にあるだろう。そのような流れは和辻哲郎などの倫理思想においても受け継がれていると思う。しかし、朱子学抜きで近世以降の儒学を論じることにはやはり問題点を感じざるを得ない。そのような観点から、本研究においては、日本の近世儒学を語るにあたり朱子学との比較の重要性をもう一度強調した。

研究成果の概要（英文）：This study analyzes the direction of Confucian understanding of modern Japanese philosophers such as Tetsuro Watsuji, and based on that, he explored the possibility of reconstruction Confucian understanding. This study is based on the research results so far, and in the final year of the study, the first year of the Reiwa (FY2019), "Discourse on Mind in Early-modern Confucianism of Japan", Published. This paper, which focuses on the issue of "Mind", analyzed Tetsuro Watsuji's recognition of Confucianism, and made a comprehensive comparison of Neo-Confucianism and Jinsai Ito's Confucian thought centered on "Mind". After clarifying the proposal of the problem in the comparison, this paper further made a comparison with the idea of Yakyong Chung in Korea, and tried to reconsider the characteristics and transformation of Confucianism in the ethical thought of modern Japan.

研究分野：倫理学、日本倫理思想史

キーワード：朱子学 伊藤仁斎 心 大学章句 和辻哲郎 西田幾多郎

1. 研究開始当初の背景

本研究の目的は、和辻哲郎、西田幾多郎の思想において、すでに多くの研究がなされているにもかかわらず、いまだに明らかになったとは言いがたい、儒教思想との関わりを探りつつ、儒教が彼らの思想を含む日本近現代の倫理思想のなかでどのように理解され、またどのような変容を遂げたのかを考察するところにあった。

2. 研究の目的

上記の背景の下で儒教の、近現代倫理思想への転回の可能性を打診することに研究の目的があった。

3. 研究の方法

研究の目的を達成するため、和辻哲郎など、日本の近現代思想家たちの儒学に関する言説を分析し、その言説と日本近世儒教との関連性を指摘し、さらにはそれらの分析を朱子学の考え方と比較していく、という研究方法を採択した。また、日本近世の儒教思想の特徴を明確にし、その上で東アジアにおける儒教思想史構築への可能性を打診するため、朝鮮の儒教との比較をも紹介しつつ、日本近世の儒教との相違点に関する研究を行った。

4. 研究成果

本研究においては、研究最終年度の2019年度に、研究期間中の研究成果を土台に「日本近世儒学における「心」の問題」(『日本女子大学紀要 人間社会学部 30号』)を発表した。従って、研究成果については、その論文の一部を抜粋して、ここに記しておくことにした。まず、この論文においては、和辻哲郎の「儒教本来の面目」という言説に注目し、その分析から入った。

(1) 儒教の本来の姿とは何か

まず、和辻哲郎(1889-1960)は『日本倫理思想史』のなかで次のように述べている。

「素行はその動機を『配所残筆』のなかで詳らかに物語っているが、それは程朱の学を学んだ後に老荘の学や禅宗などを経めぐり、結局周公孔子の道に落ちつくに至った体験の過程である。宋学の形而上学的性格は確かに老荘や禅宗から来たものであるから、宋学を経て老荘や禅へさかのぼり、それによってかえって儒教本来の面目に気づくというのは、いかにももっともな体験である」

ここで和辻のいう「儒教本来の面目」というのが、形而上学的な、何かの普遍的な根拠を唱える朱子学を通り越して、むしろ我々の日常から離れない、近き道徳を重んずる孔孟の思想を指していることは推測に難くない。しかし、朱子学との関連ないし比較からこの「儒教本来の面目」という概念を使うのなら、より慎重なアプローチが必要になるのではないだろうか。続けて和辻の見解をみてみよう。

「程朱の学は、老荘や仏教の思想の影響による形而上学的な思弁を、聖人の語の中に読み込むことによって、聖人の真の趣意を解し得たとする立場である。それに対して仁斎は、古典の学問的な考察によって、それらの形而上学的な付加物と、古典の古樸な真意とを、はっきりと弁別した。この両者はおのおのその仕事の方向を異にしているのである。前者は形而上学的思弁によって孔孟の思想を深化しようとするのであって、精確には宋代のシナ哲学と呼ぶべきものであり、従ってシナ哲学の発展段階としてそれ自身の意義を担っている。それに対して後者は、孔孟の思想に対する精確な歴史的認識の努力であって、その明らかにするところはシナの古代哲学である(中略)つまり前者は理論的研究であり、後者は歴史的研究である。(『日本倫理思想史』)」

ここで和辻は、程朱の学、つまり朱子学に対し「宋代のシナ哲学」たるものとして「理論的研究」だという認識を示している。一方、仁斎の儒学思想については「孔孟の思想に対する精確な歴史的認識の努力」だとし、従って、それは「シナの古代哲学」であり、また「歴史的研究」であると主張している。これらを見解を総合すると、和辻は、仁斎は「孔孟の思想」を以て「儒教本来の面目」としたのであり、また仁斎の思想は「歴史的」研究方法によることで、朱子学とは一線を画す画期的なものなのだ、ということになる。さらに和辻は、朱子学が「宋代のシナ哲学」であることに對し、仁斎思想の主眼は「シナの古代哲学」にあるとし、異なる意味づけを行っている。しかし、ここで朱子学と仁斎の思想とを区別付ける表現として登場する「歴史的研究」という方法論に関しては、やや安易に使われているのではないかと、という疑問が残る。というのも、その「歴史的研究」という方法論が「儒教本来の面目」という側面と絡む場合、問題は複雑になるだけでなく、むしろ仁斎の思想から朱子学を簡単に切り離すことはもはや容易な作業でなくなるからである。

では、何故、そのような問いかけが可能なのだろうか。それは、儒学思想そのものが歴史との深い関連性のもとで成長してきた哲学であり、それは朱子学においても例外ではない、否、より強烈に歴史性を帯びているとあって過言ではないからである。伊藤仁斎は確かに「聖人の言わざる所」だとして「然る所以の理」を退ける。しかし、たからといって、仁斎のこの箇所が、また古学のそのような考え方が朱子学の「歴史的研究」を全面的に否定する根拠として使われるなら、それはやや性急な論の進め方であると言わざるを得ない。そもそも、朱子学の「性即理」が孟子

の「性善説」にその根拠を求めた命題であることは周知の事実である。ところが、その明確な事実が仁斎、また日本近世の儒学を語っていく上では、何故か重用されないきらいがある。和辻も「形而上学的な思弁を、聖人の語の中に読み込むことによって、聖人の真の趣意を解し得たとする立場」の哲学であると朱子学を定義しておきながらも、性即理と性善説との歴史的なつながりについては積極的に語ろうとしない。それは何故だろうか。朱子学自ら掲げる学説の歴史を全面的に無視することはできない。従って、朱子学を唯単に「宋代のシナ哲学」に閉じ込めることは出来ないのであり、況してや「歴史的研究」ではないと見なすことにも違和感を覚えざるを得ない。

(2) 『大学章句』における「正心」をめぐる攻防

さて、和辻のいう「周公孔子の道に落ちつくに至った体験」たる「歴史的研究」が功を奏したのはどのような側面においてなのか。それを本論文においては『大学』に求めた。ここにおいて仁斎が批判の標的と定めたのは、朱子による『大学章句』（以下章句）である。『章句』のなかで、朱子は、いかにも「朱子学的な立場」に立って「心」について述べている。ここに「朱子学的立場」といったのは、まず、「心」を「身の主とする所」ととらえたからといって、その「心」に人間の身体における、いわゆる「道德主体としての全権」が与えられていることを意味するものではない、ということを目指す。それを朱子学の用語でまとめるならば、「心は性（言い換えると理）と情とを統ぶ」ということになるだろう。そうした観点からみると、「心」には確かに理の性格をもっている側面もあるが、しかし、気の性格もともに具わっているため、専ら「心」を善なるものとしてのみとらえることはできない、という流れになる。次の『章句』からの引用をみてみよう。

「謂わゆる身を脩むるはその心を正すに在りとは、心に忿懣する所あるときは、則ちその正しきことを得ず。恐懼する所あるときは、則ちその正しきことを得ず。好樂する所あるときは、則ちその正しきことを得ず。憂患する所あるときは、則ちその正しきことを得ず。心焉に在らざれば、視れども見えず、聴けども聞こえず、食らえどもその味を知らず。此れを、身を脩むるはその心を正すに在り、と謂う」（伝7章）

まず、『章句』のこの箇所の中で、特徴的なところは、心を用いる点である。そもそも古本『大学』では、ここは心ではなく、身になっている。それを程子の指摘に従い、朱子は心に書き改めた。では、何故身ではなく、心だったのだろうか。それは、「心」とは、朱子学の理論体系からだ、完全なる善でも、また完全なる悪でもない、捉え方としては「心は、すなわちこれ気」となるわけで、従って、正しておかなければならない対象だったからである。ただ、それは逆にいえば、心に対する倫理的期待感の表れでもあった。ところが、この「正心」を語る部分において、朱子学と仁斎の思想は大きく衝突する。仁斎はまず、『章句』の伝七章を記したうえで、次のような批判を加えている。

「それ心を存するの道は、忿懣・恐懼・好樂・憂患するところ無き者より要なるはなきや。書に曰く、「礼をもって心を制す」、孟子の曰く「君子は仁をもって心を存し、礼をもって心を存す」、又曰く、「仁に居り義に由る、大人の事備わる」。大学乃ちこれをもって要とせずして、徒らに忿懣・恐懼・好樂・憂患するところ無からんことを欲するは、何ぞや。これこの四つの者は、心の用なり。およそ人、この形有るときは、すなわちこの心有り。この心有るときは、乃ち忿懣・恐懼・好樂・憂患無きことあたわず。いやしくも仁をもって心を存し、礼をもって心を存するとき、すなわちこの四つの者は、即ち仁・礼の著われにして、天下の達道なり。何の悪しきことかこれ有らん。大学乃ちこれこれを識らずして、徒らに忿懣・恐懼・好樂・憂患無からんことを欲す。これ即ち孔孟の血脈を識らざるが故なり。（「大学は孔氏の遺書にあらざるの辨」『伊藤仁斎伊藤東涯』）

仁斎は、「およそ人、この形有るときは、すなわちこの心有り。この心有るときは、乃ち忿懣・恐懼・好樂・憂患無きことあたわず」と述べている。つまりそれは、「未発」「已発」との関連性からみるなら、紛れもなく「已発」的な考え方として受け入れるべきものであるのに、朱子学では専ら「心」を制御して、忿懣・恐懼・好樂・憂患という人間の最も根元的な感情を押さえることのみ考え、それでいて「心を正し」、そして「修身を完成」させようとしている。しかし、そのような論理にはやはり無理がある、と仁斎は考えていたのである。ところが、この「修身の完成」とは朱子学的な世界観からすると、「未発の状態への復帰」にはかならない。ここで『章句』序の一節をみてみることにしたい。

「蓋し天の生民を降せしより、則ち既に之に與ふるに仁義禮智の性を以てせざるは莫し。然れども其の氣質の稟、或は齊しき能はず。是を以て皆以て其の性の有する所を知りて、之を全くすること有る能はざるなり。一たび聡明叡智にして、能く其の性を盡くす者の、其の間にしづる有れば、則ち天は必ず之に命じて以て億兆の君師と為し、之をして治めて之を教へ、以て其の性に復らしむ。」（『大学・中庸』、赤塚忠、新釈漢文大系）

本来人間には誰でも「仁義禮智の性」、言い換えると「本然の性」が具わっている。しかし、「氣質の稟」、つまり「氣質の性」により、人間の本来の性は曇ってしまい、また悪行をはたらくこともある。しかし、人間はその本来の「本然の性」を取り戻さなければならない。なぜなら、「本然の性」と「至善」であり、また人間の本性はそもそも「性善」だからである。そこで、「能く其の性を盡くす者」、つまり「本然の性」を完全に実現した人物、具体的にいえば「聖人」が現れ、その聖人が人々をその最初の状態へと、すなわち「本然の性」の状態へと導いていく。言

い換えると、人々は「本然の性」という「その最初の状態」へと復ることができる、それが朱子学における「復初」という概念であり、朱子学の倫理体系の根幹をなす理論なのである。朱子学と仁斎の思想とではそれぞれ立脚点が異なる。当然ながら、心の物に対する接し方、捉え方における差が存在する。しかし、その違いを平面的に認めただけではこの『大学』における「正心」の問題は解決されない。やはり朱子学と仁斎の思想との関連性の問題においては、唯単に仁斎による朱子学への批判に終始するのではなく、まず、両者の立脚点から出発し、類似点を経て相違点に至るまでどのようなプロセスを経ることになるのかに対する全面的な再確認が必要となる。もう少し具体的に言えば、こういうことである。仁斎は、朱子学に対し真正面から抵抗しながら、和辻の言葉を借りるなら「儒学の本来の面目」を確保しようとした。ただ、ここで問題となるのは、やはり朱子学との関係、言い換えると、朱子学との距離をどう維持すればよいかという点である。たとえば、「心」の問題に関して、仁斎は「然る所以の理」を否定し、さらに朱子学における「復初」にも反対した。しかし、どうだろうか。たとえば、「善」なる概念を考えると、朱子学のように予め「こうあるべき」は設けないにしても、「赴くがまま」が「単なる放置」でないかぎり、そこにはやはり何らかの理想型が据えられているとみなしたほうが順当な考え方ではないだろうか。その点を含め、朱子学と仁斎思想との根本的な違いをどこに定めるべきか、あるいは「人間の営みに根本悪はない」という極端的な捉え方で説明がつかののだろうか、など、朱子学と仁斎思想との間には解決されていない問題が依然として残されている。

(3) 朝鮮の儒学者丁若鏞における「心」の問題

丁若鏞の思想の主眼はつまり、人欲に覆われた気質を取り除き、「その初めに復」えること、「復初」ができた時点において、倫理体系の完成を定めようとする朱子学の人生論とはその趣旨を異にしたところにある。儒教における理想の「発現の場所」は確かに人間の「心」であるといえよう。ただ、朱子学におけるこの心は「発現の場所」ではあっても、しかし「発現の主体」にはなれなかった。朝鮮の儒学者である李退溪は「心は理と気を合する」と述べていたが、しかし、正統朱子学者を自称する側の立場を借りるなら、前述した通り依然「心は、すなわちこれ気」だったからである。つまり、「心」そのものに「純善」の価値を全面的に与えることは、いわゆる正統朱子学としては許し難い理論であり、『章句』の「正心」と関連づけていうなら、「心」は依然正しておくべき対象にすぎなかったのである。

しかし、丁若鏞は、この「心」に積極的な意味を与えた。つまり、「善を欲すれば、すなわち善」、また「悪を欲すれば、すなわち悪」といった感覚で、単なる「場所」ではなく、それ自体「主体」としての意味を認めたのである。そのような「心」への積極的な捉え方は自ずと「気質」の擁護論へと発展していく。丁若鏞においては、「未発」による「本然」に対比される概念として、「気質」への低評価は行われていない。そのような側面は伊藤仁斎の「心論」との比較研究において十分検討に値する。

以上、この論文を通じて、本研究は、近現代日本の倫理思想における儒教の捉え方の方向性を分析しつつ、なお、日本近世の儒教と朱子学との比較を踏まえながら、日本における儒教思想の特徴を明らかにしようとした。さらには朝鮮の儒学を紹介することによって東アジアの儒教思想史構築への可能性をも打診した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 朴倍暎	4. 巻 30号
2. 論文標題 日本近世儒学における「心」の問題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本女子大学紀要 人間社会学部	6. 最初と最後の頁 119-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 朴倍暎	4. 巻 44
2. 論文標題 儒教は反文明論なのか - 福沢諭吉の儒教批判を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 比較思想研究	6. 最初と最後の頁 102-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 朴倍暎	4. 巻 単
2. 論文標題 変革期における湯島聖堂の位相と役割 - 幕末と明治維新期を中心に（韓国語）	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 成均館と文廟の世界遺産的価値	6. 最初と最後の頁 238-260
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 朴倍暎	4. 巻 創刊号
2. 論文標題 日本の近代国家形成と歴史認識（韓国語）	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 東洋哲学文化研究	6. 最初と最後の頁 145-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 朴倍暎	4. 巻 16
2. 論文標題 成瀬仁蔵と儒教思想	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 活動の記憶	6. 最初と最後の頁 77-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 朴倍暎
2. 発表標題 儒教は反文明論なのか - 福沢諭吉の儒教批判を手がかりに
3. 学会等名 比較思想学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 朴倍暎
2. 発表標題 日本人と韓国人の考え方の違い - 儒教思想とその文化
3. 学会等名 TAMA市民大学 (招待講演)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----